

序

薬疹の本を編集するたびに思うのは、以前に出した本からどれ程進歩したのだろうかという自責の念である。自然科学は決して直線的に進歩する訳ではなく、飛躍的な進歩の後には必ず停滞する時期が続くのは十分理解しているつもりである。筆者らが報告した薬剤性過敏症候群 (DIHS) における 6 型ヒトヘルペスウイルス (HHV-6) の再活性化は、ある意味では薬剤だけで完結していた薬疹の世界に、潜伏ウイルスの再活性化という新しい概念を持ち込んだ。それは、あたかも静かな池に石を投げ込んだ如く、新たな波紋を呼び起こし、薬疹に多くの皮膚科医の眼を向けさせたと言える。それは、薬疹の研究班の成立、種々の診断基準の策定、それによる治療の標準化へと続き、薬疹の新たな地平を開くことになった。しかしながら、その一連の仕事は、橋本公二、飯島正文、池澤善郎先生らとの共同作業があって初めて可能であったと今更ながら思う。その先生方が次々と現場から去った今、筆者一人が残された形となった。

科学者や芸術家の仕事を振り返った時、そこには必ず、若さの勢いがあったできた仕事、円熟がもたらした仕事、歳を重ねて初めてできた仕事といった、年代に応じた仕事の違いがある事に気付く。それは個人だけにとどまらず、集団においても言える。その視点から言えば、薬疹に関する研究の進歩は、今円熟の時代を迎えているように思える。そこには、HHV-6 の再活性化がもたらしたようなインパクトはないかもしれない。しかし、薬疹の黎明期に明らかになった数々の現象、そこから生ずる疑問は、現在少しずつ明らかにされつつある。それはあたかも次に来る飛躍の時代を予知しているかのように、筆者には思えてならない。

本書を手にとって見た時、現在一見平穏に見える薬疹の世界に、再び新しい波が訪れつつある事を痛感する。薬疹の世界をリードして来られた上記の諸先生の名前は、もはや本書に見出すことはできない。諸先生が去られた後に一人残された筆者は、これまでの進歩を停滞させてはならないという強烈な使命感を感じながら、本書の編集をしたことをここに告白しておきたい。

幸いなことに、そのような停滞は本書から微塵も感じられなかった。ここには、薬疹のこれからを担うであろう若手、中堅の諸先生方の、先輩をしのぐ程のエネルギーに満ちた仕事ぶりを感じとることができる。しかも、発表直前の 2015 年度改訂の薬疹診療ガイドラインがここで初めて披露されているのも、本書の大きな特徴となっている。20 年後の薬疹の世界がどのような変貌をとげているか、現在の筆者には想像もつかない。残念ながら筆者は、それを恐らく見ることはできないであろう。もしかしたら、賢い読者ならその変貌の予兆を本書から読み取ることができるかもしれない。本書が、諸先輩に対して胸を張れる内容になったことに、一人残された筆者は現在ホッと安堵の胸をなでおろしている。

2016 年 4 月

塩原 哲夫